

体育社会学研究の動向と展望：日本体育学会のシンポジウム・一般発表から

北村尚浩¹⁾

Trends and prospects in the sociology of physical education research

Takahiro KITAMURA

Abstract

The purpose of this study was to clarify research trends in the Division of Sociology of Physical Education and Sport of the Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences through an overview of symposium themes and a quantitative analysis of the titles in oral and poster sessions at the Japanese Society of Physical Education and Sport Sciences Conferences.

The study analyzed and reviewed both symposium themes and the titles of oral and poster presentations at conferences held between 1995 and 2016.

The main findings were as follows.

- 1) Social issues relevant to each period were chosen as symposium themes. Information was transmitted from academic perspectives of the sociology of physical education and sport.
- 2) Research interests in oral and poster presentations were also attuned to the social issues relevant to each period.
- 3) Research identities identified in this domain continue to remain a matter of debate.

Keywords: Text mining, Japanese Society of Physical education and Sport Sciences, parallel presentation, symposium

和文抄録

本研究の目的は、日本体育学会大会体育社会学専門領域におけるシンポジウムのテーマを概観するとともに、一般研究発表のタイトルの計量的分析を通して、体育社会学領域における研究動向を明らかにすることであった。そのため、1995年から2016年の間に開催された日本体育学会大会体育社会学専門領域におけるシンポジウムのテーマと一般発表論文を対象として分析、検討を行った。主な結果は以下の通りである。

- 1) シンポジウムのテーマとしてはそれぞれの時期における社会的課題が取り上げられ、体育社会学専門領域として学術的な情報発信がされてきた。
- 2) 一般発表においても、概ねそれぞれの時期での社会的課題、社会的関心に研究の関心も向けられてきた。
- 3) 従来から指摘されてきた「体育」と「スポーツ」を巡っての専門領域のアイデンティティについては、未だ議論の余地があることが示唆された。

キーワード：テキストマイニング、日本体育学会、一般発表、シンポジウム

¹⁾ 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

はじめに

1950年に第一回大会を開催した日本体育学会は、6,000人を超える学会員を擁する日本最大の体育・スポーツに関する学術団体である。2017年に開催された第68回大会では15の専門領域で研究発表がなされたが（日本体育学会, 2017）、これらは1962年に創設された専門分科会に端を発している。それ以前にもそれぞれの発表の専門性に分かれて研究発表が行われていたが、専門分科会の創設によってより専門性の高いシンポジウムなどが開催されるようになり、複合領域としての体育学がその専門性を高めていくことになった。

体育社会学専門領域（以下、専門領域）は、主に体育の場における様々な現象を、社会学の理論と研究手法によって解明しようとする研究領域である。「主に」にとしたのは、体育のみならずスポーツ全般を扱う研究も少なからず存在しているからである。井上（2016）は、体育社会学の独自性について述べる中で、「実践的・政策学的関心が強い」と述べるとともに実践的影響力の強さを指摘して、体育社会学の役割について触れている。佐伯（2005）は体育学会の創設から50年間の体育社会学専門領域における研究を、日本体育学会の創設から専門分科会（現在の専門領域）の設置までの「萌芽期」、専門分科会の設置から機関紙である「体育社会学研究」が刊行された1972年までを「創設期」、以後、1991年に日本スポーツ社会学会が設立されるまでを「展開期」、そしてそれ以降を「模索期」の4つの期間に分類し、それぞれの研究動向とその特徴を分析している。とりわけ、日本スポーツ社会学会の設立によって体育社会学からスポーツを切り離す意図が窺え、体育社会学における「体育研究のアイデンティティとそのパラダイムの明確化を図る」ことが期待されたが、「模索期」以降の研究動向に基本的な変化はなかったとしている。

「模索期と呼ばれているのは、有力なモデルを喪失しており、ポストモダンの面白主義を超える新たなパラダイム模索期に入っていると言えよ

う」との指摘（佐伯, 2005）から10余年が経過したが、その後の専門領域における研究動向に言及した報告は見られない。探索期と言われた時期から今日に至るまでの研究動向を明らかにすることは、体育社会学領域の在り方を検証し今後の研究の方向性を示す上で重要な示唆を含むものであると考える。

そこで本研究では、日本体育学会大会体育社会学専門領域におけるシンポジウムのテーマを概観するとともに、一般研究発表のタイトルの計量的分析を通して、体育社会学領域における研究動向を明らかにすることを目的としている。

方法

1) 分析対象

日本体育学会における体育社会学の研究動向を捉えるため、佐伯が探索期とした1991年以降、1995年から2016年までの間に開催された日本体育学会大会体育社会学専門領域（専門分科会を含む。以下、専門領域）におけるシンポジウムのテーマと一般発表論文を対象とした。国立情報学研究所論文情報ナビゲータ CiNii（国立情報学研究所, 2017）に収録されている日本体育学会大会号及び予稿集からシンポジウムのテーマ、ならびに一般発表の演題を収集した。この期間中に専門領域主催のシンポジウムは22回開催されており、一般発表の総演題数は813演題であった。

2) 分析方法

シンポジウムの演題については、年次ごとに一覧にまとめ、それぞれの時期における主な社会事象との関連を検討した。一般発表の演題については、それぞれの発表者の所属機関ごとに演題数をカウントするとともに、演題とサブタイトルに対してKH Coderを用いたテキストマイニングによる形態素解析を行った。形態素解析にあたっては、名詞と「総合型地域スポーツクラブ」のような複合語に限って解析を行った。次に頻出語を抽出し上位を占める形態素を確認した。続いて、15

回以上出現する頻出語を対象とした共起ネットワークを作成した。さらに対象期間を4つに分割しそれぞれの期間との対応分析を行った。これらの分析の結果から、体育社会学の研究傾向及び今後の研究の方向性について考察を行った。

ところで、本研究で用いたテキストマイニングという手法は、従来質的データとして扱われてきたテキスト型データを、数値化して計量的分析手法によって内容分析を行うものである。その一方で、データの収集や分析の過程に曖昧さが存在するとの指摘もある（日和，2013）。また、分析では自動抽出された語の出現頻度をもとに統計的な処理がなされており（樋口，2012）、出現頻度の少ない語は分析から除外されるため、特にインタビューやアンケートの自由回答などの非構造化データを扱う際には重要な語を見落とす危険性を孕んでいる。本研究で扱うデータは、研究発表の演題という構造的データであり、語句の出現頻度から専門領域の研究動向を探ることを目的としているので、このようリスクはないと考える。

結果

1) シンポジウムの動向

期間中の専門領域主催のシンポジウムのテーマを表1に示している。これを見ると、社会における体育・スポーツに関する様々な問題がテーマとして取り上げられてきたことがわかる。例えば、1995年には、1991年の大学設置基準の大綱化によって投げかけられた大学教育における体育の存在意義を問う声や、あるいは大学経営の一つのツールとして有名選手を積極的に集め広告灯としての体育部、運動部の問題を取り上げ、大学における体育・スポーツの在り方に対する疑問が社会の中で顕在化したことを背景として「大学スポーツに未来はあるか」というテーマが設定されている。その後、1996年の夏季アトランタ・オリンピック、1998年の冬季長野オリンピックを受けてコマーシャリズム、見るスポーツといったテーマが取り上げられている。そして日本体育学会第50回記念大会が開催された1999年と翌2000年には、体育社会学研究の成果と将来の展望が議論されて

表1 シンポジウムのテーマ

年	テーマ
1995	ディベート：大学スポーツに未来はあるか
1996	現代スポーツとコマーシャリズム
1997	加齢に伴うスポーツ教育
1998	「みるスポーツ」の魅力と将来展望
1999	体育社会学研究の成果と将来展望（日本体育学会第50回記念大会）
2000	体育・スポーツ社会学研究のニューパラダイム
2001	体育・スポーツの公共性をめぐる21世紀ビジョン
2002	日本における21世紀のスポーツ振興の課題と展望：政策・クラブ・NPO・指導者
2003	スポーツと多文化共生
2004	転機にある企業スポーツ：新たなモデルと地域密着を探る
2005	日本におけるスポーツ・健康政策の評価と課題
2006	体育は学校教育を変えられるか：体育社会学からの発信
2007	いわゆる「ゆとり教育」からみた今日の体力問題
2008	「日本のスポーツ政策の課題と展望」：新スポーツ法の制定をめぐって
2009	動き出した新スポーツ振興法：社会政策論からの課題
2010	日本のスポーツ立国戦略に足りないものは何か：スポーツ政策の国際比較からの提言
2011	スポーツの社会的役割と可能性の再考：スポーツによる復興支援の中で
2012	学校体育における武道必修化の意味と社会学的課題：何が問題なのか
2013	学校運動部における「体罰」：問題の所在とその批判的検討
2014	わが国におけるメガスポーツイベントの社会文化的意義と課題
2015	Beyond2020 & Agenda2020から体育・スポーツ社会学の研究はいかなる方向に向かうべきなのか：都市、地方、多様性、差別、成熟、開発、震災
2016	2020年東京オリンピック・パラリンピック後のスポーツ環境を考える

いる。そして、2001年、2002年は2000年に制定されたスポーツ振興基本計画（文部省、2000）や2003年に改正された地方自治法を受けてのテーマ設定であると言えよう。また、2005年にはスポーツ振興基本計画、健康日本21（第1次）の中間評価を控え、スポーツ振興、健康づくり政策の評価をテーマとしている。

2006年、2007年は学校体育に回帰し、その在り方を問いかけるようなテーマが設定されており、2008年から2010年にかけてはスポーツ振興法に代わる新たな法整備やスポーツ振興の方向性が取り上げられ、とりわけ2010年には「スポーツ政策の国際比較からの提言」とサブテーマに掲げられており、学会としてスポーツ振興への介入を意識したものになっている。2011年はその年の3月に発生した東北大震災からの復興におけるスポーツの社会的役割とその可能性について、2012年、2013年は中学校における武道の必修化や高等学校における運動部での体罰問題がテーマとして取り上げられている。そして、2020年の夏季オリンピック・パラリンピック開催地が東京に決定したこと

を受けて、2014年から2016年にかけては、オリンピックをはじめとするメガスポーツイベントの役割と課題がテーマとして設定されている。

このように見てみると、概ね社会で体育、スポーツを取り巻く問題あるいは課題を受けて、専門領域のシンポジウムのテーマが設定され、社会に向けた情報発信が行われてきた様子が窺える。

2) 一般研究発表の動向

図1に一般発表演題数の推移を示している。対象期間中の一般発表は813演題で、最も演題数が多かったのは1996年の千葉大会、2007年の兵庫大会でいずれも53演題の発表があった。次いで2011年鹿児島大会（49演題）、1997年新潟大会（43演題）の順で、逆に最も発表数が少なかったのは2000年の奈良大会（22演題）であった。大会によって増減が見られるが、一学会大会あたりの平均演題数は37演題であった。

学会の役割の一つとして若い研究者の育成が挙げられる。対象期間中の全体の37.6%にあたる306演題が大学院生の発表で、2005年（茨城）、

60

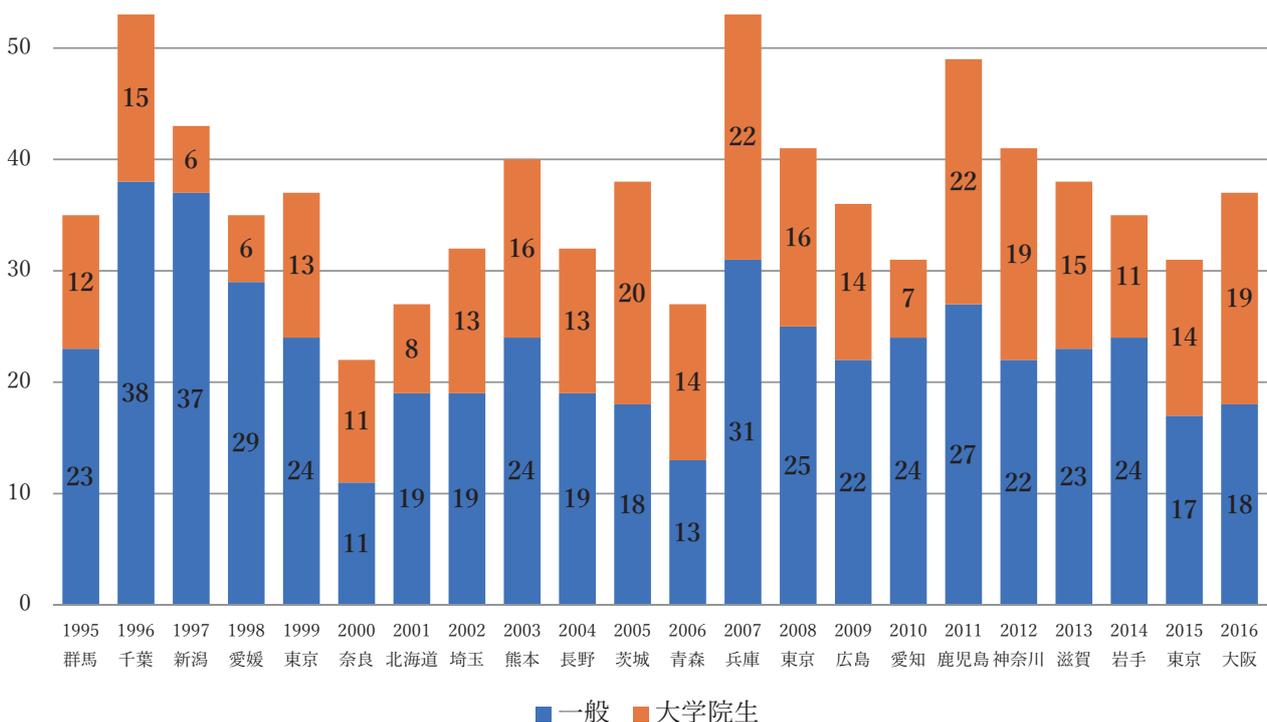


図1 一般発表演題数の推移

表2 頻出語（上位150語）

抽出語	n	抽出語	n	抽出語	n	抽出語	n	抽出語	n
スポーツ	381	社会学	23	身体	16	規定	11	学習	9
体育	96	文化	23	制度	16	効果	11	教員	9
運動	78	経験	22	部活動	16	市	11	出場	9
地域	73	指導	22	スポーツイベント	15	児童	11	場面	9
活動	62	指導者	22	意味	15	政策	11	状況	9
学校	52	授業	22	育成	15	全国	11	青少年	9
社会	52	大学生	22	過程	15	満足度	11	阻害要因	9
大会	52	高校	21	ウォーキング	13	遊び	11	体力	9
実施	46	スポーツ参加	20	スポーツ振興	13	コミュニティ	10	中高年	9
総合型地域スポーツクラブ	44	健康	20	期待	13	パターン	10	特性	9
意識	42	組織	20	現状	13	ワールドカップ	10	背景	9
参加者	41	中学校	20	参加動機	13	競技者	10	変容	9
評価	41	キャリア	19	種目	13	現代	10	オリンピック	8
比較	40	形成	19	住民	13	行為	10	プロスポーツ	8
参加	38	視点	19	都市	13	市民マラソン	10	プロセス	8
行動	37	社会化	19	動向	13	試み	10	運営	8
課題	36	対象	19	余暇	13	実態	10	観光	8
選手	36	大学	19	アスリート	12	縦断的	10	志向	8
サッカー	34	野球	19	バレーボール	12	成人	10	資格	8
競技	33	クラブ	18	プロ	12	特徴	10	実践	8
教育	32	継続	18	支援	12	能力	10	小学校	8
高齢者	30	モデル	17	日常生活	12	変化	10	身体活動	8
女性	30	環境	17	役割	12	変遷	10	専門	8
イベント	29	国際	17	プログラム	11	保護者	10	部員	8
ボランティア	29	女子	17	レジャー	11	スポーツライフ	9	理論	8
子ども	28	障害者	17	可能性	11	スポーツ少年団	9	データ	7
スポーツクラブ	27	生涯スポーツ	17	開発	11	ツーリスト	9	会員	7
運動部活動	25	生活	17	学生	11	マネジメント	9	外国	7
関係	25	教師	16	観戦者	11	メディア	9	外部指導者	7
事業	24	構造	16	観点	11	開催	9	既婚女性	7

2006年（青森）の2大会では大学院生の発表がそれ以外の発表よりも多かった。

次に、一般発表の演題とサブタイトルについて、KH Coderを用いて形態素解析を行った。その結果、総抽出語21,184語、異なり語1,988語が抽出された。出現頻度の高かった上位150の頻出語を表2に示している。発表演題及びサブタイトルに用いられる頻出語の全体傾向としては、「スポーツ」が最も多く（n=381）、次いで「体育」（n=96）、「運動」（n=78）、「地域」（n=73）、「活動」（n=62）等であった。このようにしてみると、「体育」社会学専門領域での発表でありながら「体育」という用語よりも「スポーツ」の方が発表演題に多く使われていることが明らかである。

専門領域での発表演題数は大会によって増減が見られるが、概ね30~40演題で推移してきた。また、演題のおよそ3分の1が大学院生の発表であり、体育社会学領域における研究者育成の場としての役割も期待できる。そして発表演題における上位150の頻出語を見てみると「スポーツ」「体育」「運動」「活動」「地域」「学校」などがあり、これらは専門領域が社会における人々のスポーツ、体育活動を扱う研究領域としての特徴とも言える。しかしながら、「体育」よりも「スポーツ」がおよそ4倍の頻度で使われており、「体育」と「スポーツ」をめぐる専門領域のアイデンティティの問題が浮き彫りになったといえる。この「体育」と「スポーツ」を巡る議論は、今村（2000）、佐

伯 (2005), 菊 (2015) らによっても指摘されてきた。体育学会が発足した当時は、大学を含む学校体育や運動部等の学校小集団を扱った研究発表が多く見られたが、1960年代には研究者の関心が急速に体育からスポーツへ移行したとされ (今村, 2000), 1964年のオリンピック東京大会開催に伴う社会的関心がスポーツに向けられたことが反映されている。1991年には日本スポーツ社会学会が設立され、体育研究のアイデンティティとそのパラダイムの明確化を図ることが期待されたが、思惑通りにいかなかったことが示唆されている (佐伯, 2005)。その10年後にも、菊 (2015)

はスポーツ社会学との棲み分けや関連性から、体育社会学の独自性をどのように創造していくのかと、この分野の方向性のあり方を問いかけており、専門領域におけるアイデンティティの確立が課題であることが示唆される。

次に、演題の中で用いられた語と語の関係性を表す共起ネットワークを図2に示している。共起の程度が強いものほど太い線で結ばれており、出現数の多い語ほど大きな円で描かれている。実線で結ばれている語は同じサブグラフに含まれており、8個のサブグラフが検出された。各サブグラフに含まれる頻出語から、専門領域における研究

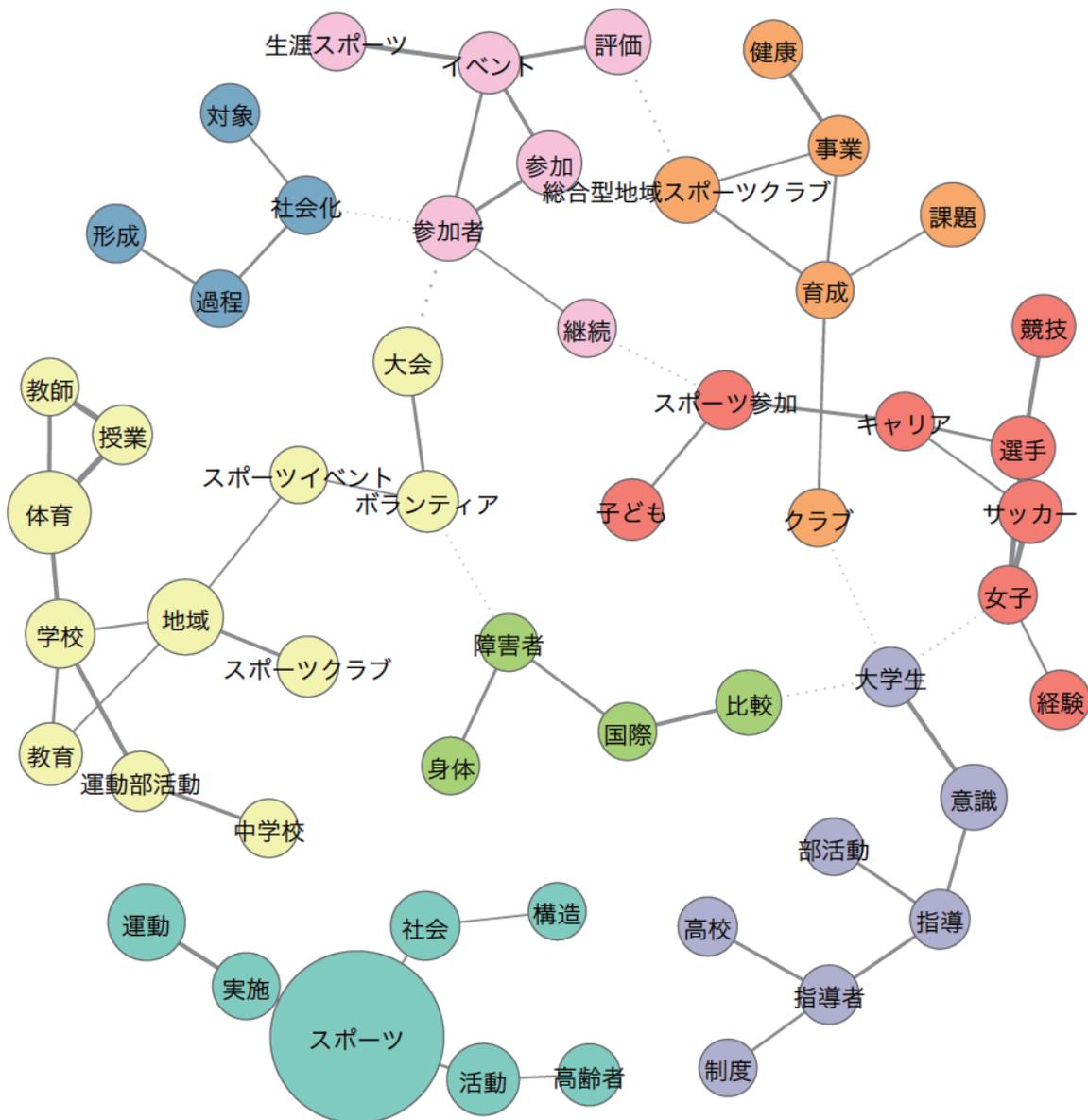


図2 共起ネットワーク

表3 サブグラフに含まれる抽出語と演題例

サブグラフ	主な抽出語	主な発表演題 [†]
1	スポーツ, 運動, 活動, 実施, 社会, 高齢者, 構造	主観的健康感の形成に運動・スポーツ実施が及ぼす影響 (海老原, 1997) 高齢者の運動・スポーツ実施パターンとその効果による縦断的研究 (石澤, 2001)
2	体育, 地域, 学校, 教育, 授業, 運動部活動, スポーツクラブ	現代の学校における体育教師という存在。ラベリング論の視点から (野村, 2007) 中学生における学校運動部と地域スポーツクラブの選択要因の比較研究 (中澤, 2002)
3	意識, 指導, 指導者, 部活動, 大学生	高等学校運動部活動における外部指導者と顧問教員のスポーツ指導意識 (蔵之前, 2008) 社会体育指導者の資格制度に関する運用的課題: 資格の更新状況から制度を考える (永松, 2010)
4	選手, サッカー, 競技, キャリア, 女子, 経歴	一流スポーツ選手のスポーツキャリア研究: バレーボール選手の学校間及び地域移動パターンについて (豊田, 1995) 日本人女子サッカー選手のキャリアプロセスに関する研究 (上代, 2010)
5	社会化, 対象, 過程, 形成	元高校球児のスポーツ的社会化過程に関する研究。高校球児を子どもにもつ元高校球児 (親) を対象として (甲斐, 2011)
6	総合型地域スポーツクラブ, 課題, 事業, 育成	奈良県における総合型地域スポーツクラブ育成政策に関する一考察 (高松, 2012)
7	比較, 障害者, 国際, 身体	国際比較から見る障害者のスポーツの統合類型に関する考察: 英国, オーストラリア, 韓国, シンガポールの比較研究 (田中, 2012)
8	参加者, 参加, 生涯スポーツ, イベント, 評価	生涯スポーツイベント参加者の大会満足度: 菜の花マラソン参加者の類型化による比較 (北村, 1999)

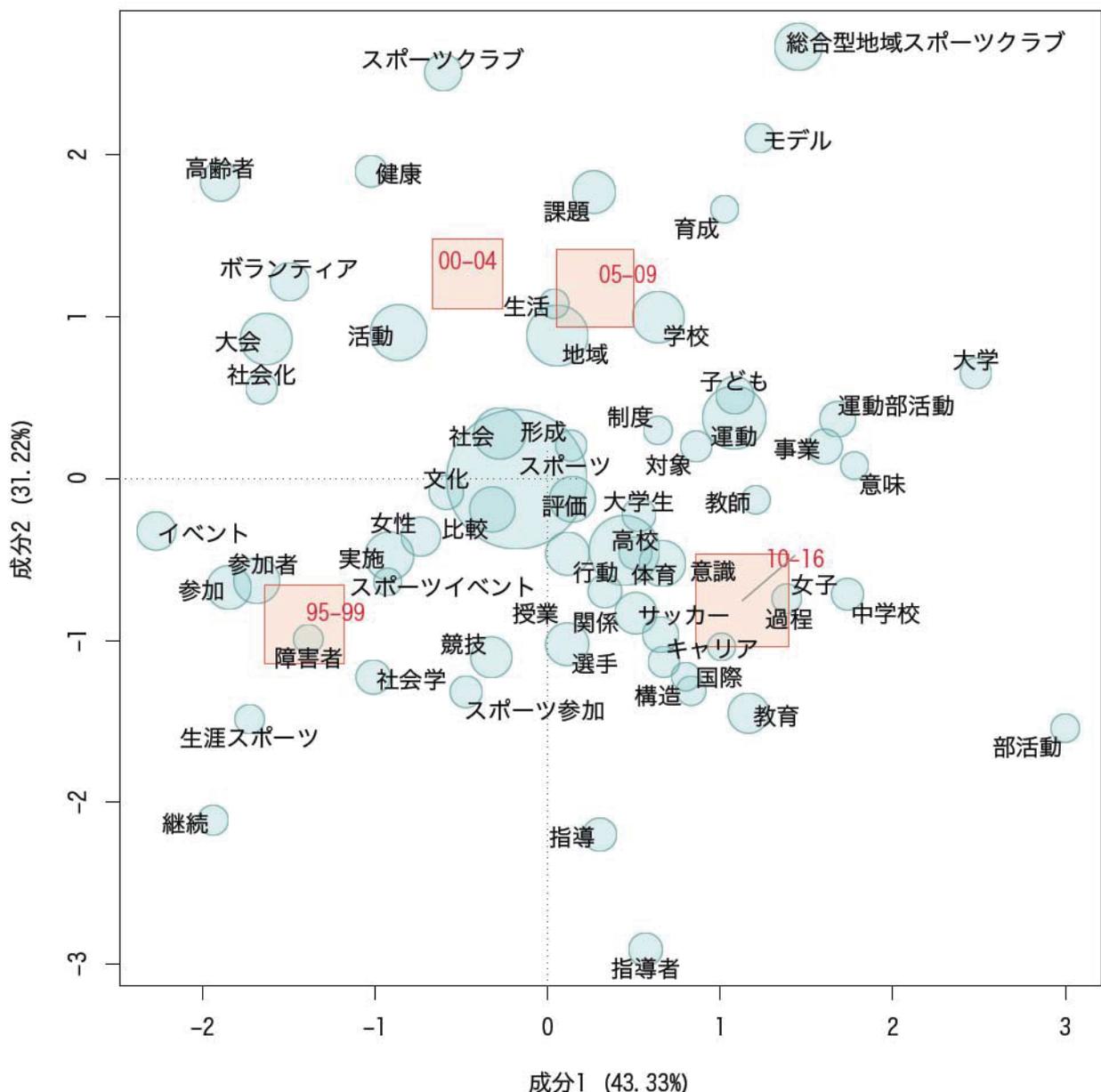
[†]発表者名のみ記載し, 共同研究者は省略

発表のキーワードを整理すると (表3), サブグラフ1には「スポーツ」や「運動」「活動」など運動・スポーツの実施や継続に関する語が抽出されている。サブグループ2では、「体育」「学校」「教育」など学校での教科体育や部活動に関する語が抽出されている。サブグラフ3では、「指導」「指導者」といったスポーツ指導に関する語が抽出され, サブグラフ4は「選手」「競技」「キャリア」など競技者に関する語が抽出されている。サブグラフ5は「社会化」「形成」「過程」というスポーツ参加へのプロセスを扱う社会化研究を示唆する語で構成されている。サブグラフ6は「総合型地域スポーツクラブ」「課題」「事業」のように, 国の政策として展開されてきた総合型地域スポーツクラブ育成に関する語が, サブグラフ7では「比較」「障害者」など障害者のスポーツ参加を扱う語が, そしてサブグラフ8では「参加者」「生涯スポーツ」「イベント」といった生涯スポーツイベント参加や評価などの語がそれぞれ抽出されている。

続いて, 期間を1995年～1999年, 2000年～2004年, 2005年～2009年, 2010年～2016年の4つに区分して外部変数とし, それぞれの期間の特徴語を抽出した。表4にはその上位10語を示している。1995年～1999年は「スポーツ」「イベント」「参加」「大会」, 2000年～2004年は「スポーツ」「地域」「運動」「活動」, 2005年～2009年は「総合型地域スポーツクラブ」「社会」「学校」「評価」, 2010年以降は「体育」「運動」「意識」などの語が挙げられている。これらの年代区分による対応分析の結果を図3に示している。第1象限に2005年～2009年, 第2象限に2000年～2004年, 第3象限に1995年～1999年, そして第4象限に2010年～2016年が配置され, それぞれの年代での頻出語が各象限に配置されている。各象限に配置された抽出語から, 成分1 (x軸) と成分2 (y軸) とがそれぞれ何を表しているのか検討を試みた。各成分は数理的に得られたものであり, 正の方向に行くほど何らかの傾向が強いと解釈できる場合もあるが, そうした解釈が困難な場合もある。今回の分析結果からは

表4 年代ごとの特徴語

'95-'99		'00-'04		'05-'09		'10-'16	
抽出語	Jaccard係数	抽出語	Jaccard係数	抽出語	Jaccard係数	抽出語	Jaccard係数
スポーツ	.215	スポーツ	.178	総合型地域スポーツクラブ	.123	体育	.119
参加	.086	地域	.091	社会	.065	運動	.092
大会	.079	運動	.088	学校	.061	意識	.060
参加者	.077	活動	.077	活動	.059	学校	.058
イベント	.065	課題	.068	評価	.054	教育	.054
社会	.063	高齢者	.064	大会	.053	選手	.053
活動	.062	比較	.061	行動	.050	サッカー	.050
継続	.052	ボランティア	.060	健康	.049	評価	.049
実施	.052	スポーツクラブ	.060	子ども	.047	指導者	.048
競技	.049	学校	.058	参加	.045	行動	.046



明確な解釈が困難であるが、あえて述べるならば、成分1は原点から負の方向に「スポーツ」「イベント」「参加者」「高齢者」などの語が、正の方向には「体育」「中学校」「高校」「大学」などの語が布置されていることから、「スポーツ-学校体育」を表すものと解釈できよう。一方で成分2では、配置された語句から軸の解釈をすることは困難であった。

4つの年代ごとの動向について、それぞれの年代の特徴語として挙げられた語句と対応分析の結果から検討すると、1995年～1999年は、「イベント」「大会」や「参加」「参加者」、「継続」「実施」等が特徴語として挙げられている。また、対応分析の結果からも同様の傾向が読み取ることができ、さらに「生涯スポーツ」が原点から離れてプロットされている。対応分析では、特徴的な語は原点から離れて配置されることから、この年代は生涯スポーツの視点からスポーツ実施や継続、イベントへの参加への関心が高かったと考えられる。2000年～2004年にかけては、「地域」「スポーツクラブ」「ボランティア」や「運動」「高齢者」などが特徴語として挙げられ、対応分析からは「スポーツクラブ」「高齢者」「ボランティア」などが原点から離れた位置にプロットされている。前の年代からの生涯スポーツへの関心の流れを受け、高齢者の健康づくりや地域スポーツクラブへの関心が高まった時期と考えられる。この年代に端を発し、2005年～2009年では「総合型地域スポーツクラブ」研究が多く見られるとともに、子どもの体力低下が社会的な関心として高まりを見せたことを背景として、「学校」「子ども」「運動部活動」などが研究対象として挙げられている様子が窺える。そして2010年～2016年では「体育」が「学校」「教育」とともに特徴語として挙げられている。対応分析からは、「中学校」「授業」「高校」などもそれぞれが近い位置に配置されていることから、「体育」社会学への回帰傾向が窺える時期と捉えることができよう。

結語

以上、1995年から2016年の間に日本体育学会体育社会学専門領域（専門分科会）におけるシンポジウムと一般発表の演題から、その動向を検討してきた。その中で、シンポジウムにおいてはそれぞれの時期における社会的課題がテーマとして取り上げられ、体育社会学専門領域として学術的な情報発信がされてきた。また一般発表においても、その研究発表はそれぞれの研究者の興味や関心に寄るものではあるが、概ねそれぞれの時期での社会的課題、社会的関心に研究の関心も向けられてきた。つまり、社会事象としての体育あるいはスポーツを社会学的な視点から、より広く言えば学術的な視点から記述することに注力されてきたと言えよう。同時に、日本体育学会の体育社会学専門領域であるにも関わらず、「体育」という語句以上に「スポーツ」という語句が演題に多用されており、これまで幾度となく指摘されてきた「体育」と「スポーツ」を巡る専門領域のアイデンティティについては、未だ議論の余地があることが示唆された。また、学会発表時に用いられている専門領域のコード表は、少なくとも30年余りにわたって改訂されていないことなどからも、社会における体育やスポーツのあり方のめまぐるしい変化に対応しきれていない感は否めない。

2016年に開催された夏季オリンピック・リオデジャネイロ大会の陸上競技では、400mリレーで日本が銀メダルを獲得するという歴史的な快挙が成し遂げられた。この事実を目の当たりにした時に、この事象を「スポーツ」として扱うのか、あるいは「体育」として扱うのかという視点が、体育社会学研究に取り組む上では必要だと考えられる。「スポーツ」の視点に立てばオリンピックで銀メダルを獲得したという事実であり、「体育」の視点に立てばこの事実、あるいは選手の技術やパフォーマンスは体育の教材として扱うことが可能である。つまり、「体育」or「スポーツ」の視点から社会における体育やスポーツの事象を捉えるのか、あるいは、「体育」and「スポーツ」の視

点からなのかという立ち位置を明確に示しその独自性を示していくことが、体育社会学研究のこれからの課題の一つに挙げられる。さらには、体育社会学研究のアウトカムとインパクトについても、社会的要請に対して体育社会学専門領域として評価が求められる。井上（2016）が指摘するような体育社会学研究の役割が果たされているか否かの自己評価も、体育社会学専門領域の課題と言えよう。

文献

- 樋口耕一（2012）質問紙調査における自由回答の分析：KH Coderによる計量テキスト分析の手順と実際。社会と調査, (8), 92-96.
- 日和恭世（2013）ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察。評論・社会科学, 106, 141-155.
- 今村浩明（2000）50年間の体育社会学を振り返る。体育学研究, 45 (2), 262-266.
- 井上俊（2016）スポーツ社会学からみた体育社会学の独自性。日本体育学会体育社会学専門領域編。体育社会学の今後の在り方について考える, 一般社団法人日本体育学会第67回大会体育社会学専門領域プレセッション報告書.
- 菊幸一（2017）体育社会学の独自性を考える。体育社会学専門領域ホームページ。http://pesociology.jp/about/代表あいさつ-3.html. 2017年9月30日参照
- 国立情報学研究所（2017）国立情報学研究所論文情報ナビゲータ CiNii. 2017年10月5日参照.
- 日本体育学会（2017）日本体育学会第68回大会プログラム。一般社団法人日本体育学会：東京, pp.60-68.
- 佐伯年詩雄（2005）体育社会学研究の半世紀：そのあゆみから、課題を展望する。体育学研究, 50 (2), 207-217.